

第 24 回世界石油会議カルガリー大会報告書
(概要版)

2023 年 11 月

世界石油会議日本国内委員会

世界石油会議(WPC)第24回カルガリー大会は、2023年9月17日から21日まで、カナダカルガリー市のBMOセンターで開催された。加盟各国から5,000名以上が参加し、併設の展示会にも1万名以上の多くの見学者が来場した。

会議のメインタイトルは「Energy Transition :The Path to Net Zero」であり、気候変動や環境に配慮しつつ、すべての人々にエネルギーを届けるために、信頼できる経済性を持ったよりよい社会に向けて、Net Zero へのアプローチを探る場として設営された。

17日夕刻からの開会式では、地元アルバータ州やカルガリー市長からのメッセージが披露され、翌18日からセッションが開始された。

18日最初のセッションは、サウジアラビアのエネルギー大臣であった。同国は、次回2026年の世界大会の開催国(於:リヤド市)であり、また同国国営石油会社のCEOであるAmin Nasser氏が、Dewhurst賞(WPCの名誉ある賞)を受賞するなど、サウジを印象付けるスタートとなった。



また世界石油会議は、よりエネルギー全般を包括する組織とすることが決定しており、名称をWPC Energyに変更することが、本世界大会中に披露された。

本資料は、今回世界大会に現地でご参加いただいた、会員各社代表からの報告をまとめてあるが、大会ホームページで紹介された主な議論に関しても以下ご紹介したい。

【ブルー水素とCCS】

サウジエネルギー省首脳は、天然ガスベースのブルー水素は、CCSが最初に大規模に利用されるプロジェクトとなり、世界の産業界のベースとなろうと述べた。またコンサルタントのウッドマッケンジーは、CCSの能力は2022年で年5,000万トンであるが、2030年代には7倍増の3億7,000万トンになろう、そのためには1,500億ドルの投資が必要になると述べた。



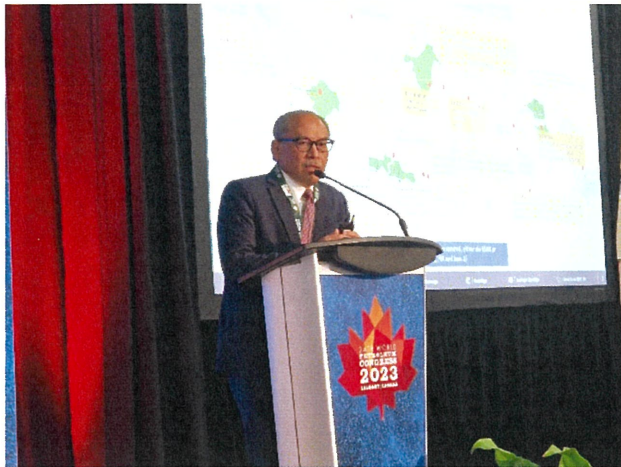
【エネルギー転換、エネルギー安全保障と資金調達】

ユーラシアグループ首脳は、ロシアのウクライナ侵攻以降、エネルギー転換の速度は鈍りつつあり、またエネルギー安全保障に対する考え方も、その国がどのようなポジションかによって異なってきており、結果としてエネルギー転換を主導するリーダーシップに隙間が生じている。このため、転換のための資金調達に一部問題が生じ始めている。



【インドネシア LNG 増産へ】

インドネシアエネルギー大臣は、現在進めているアンダマン海での LNG 計画が順調に進めば、インドネシアは再び世界トップクラスの LNG 輸出国となると述べた。一方で、BPと進めている CCUS プロジェクトが 2026～27 年頃から稼働する見込みであり、これによって同国の CO2 排出量は、2030 年までに 30%削減され、さらに 2060 年までにカーボンニュートラルを達成する見込みである。



【低炭素化は必ずしも電化推進ではない】

スペインの Repsol 首脳は、人々は低炭素化は電化の促進と考えがちであるが、再生エネルギー等を用いてそれ以外でも低炭素化を進めることができると述べた。同社は現在廃棄物から再生エネルギーを年間 100 万トン製造しており、2030 年には 250 万トンまで拡大の予定である。またサウジアラムコと、e-fuel に関するジョイントベンチャーも発足させており、こういった燃料が、液体燃料を必要とする船舶や大型トラック、化学原料などに供給されることとなる。

